

<論説>近郊都市の台地部住宅地における地名 ： 相模原市・座間市を事例として

HAMADA, Hiroaki / 浜田, 弘明

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

34

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

1995-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026148>

近郊都市の台地部住宅地における地名

—相模原市・座間市を事例として—

浜 田 弘 明

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| I はじめに | III 新興住宅地における住居表示の実施と町名 |
| II 相模原台地北部における地名変化の動向 | 1 住居表示町名に見る地名の志向 |
| 1 地域の概況 | 2 新町名の決定経緯 |
| 2 地形図と土地宝典に見る地名 | IV おわりに |

I はじめに

「地名」という言葉の一般的解釈は、その字が示す通り、「土地の名称¹⁾」ということになろう。地名と最も結び付きの深い研究領域の一つである地理学においては、端的には「大小さまざまな地域単位につけられた名²⁾」、「土地を認識し、その土地と他とを区別するためにはかならず人間がつけた符号³⁾」などと説明され、土地・地域単位の名あるいは符号とされている。

さて、1962年に「住居表示に関する法律⁴⁾」(以下、「住居表示法」という)が制定されて以来、都市部の地名、ことに字名は大きく変わり始めた。東京周辺の近郊都市では、1960年代から70年代にかけて、急激な人口増加に伴う都市化の進行に呼応して、新興住宅地を中心に新しい地名が続々と誕生した。中でも、全国的に最も激しい人口増加を見た、東京西郊の相模原市を中心とする相模原台地一帯は、その傾向が顕著で、新たに付けられた新興住宅地の住居表示町名に対し、「土地の伝統に根ざさない」「安易な東京模倣」など相次ぐ批判⁵⁾が浴びせられた。しかし、新興住宅地に付けられた地名が安易なもの、果たして言い切れるであろうか。仮に安易に見える地名であったとしても、住民もしくは自治体が、あえてそのような地名を選定するに至るには、正当なしかるべき理由があるはずである。これを検証せずし

て、安易に地名批判はできないであろう。

都市化の進行とそれに伴う住居表示の実施が急速に進み、地名を取り巻く環境が大きく変わった結果、地名改変に対する関心は高まり、こうした問題に関わる論考や、旧来の地名を取り戻そうとする運動も盛んになった⁶⁾。このような観点から、新興住宅地などに見る新地名への批判は、数多く出されているものの、背後にまで踏み込んで、その批判対象となった地名の持つ本来の意義などについて検証された論考はあまり例を見ない。さらには、新しい地名は、住宅地開発という都市化現象とどのようなかわり合いを持っているのだろうか。

本稿では、神奈川県相模原市及び座間市を事例として取り上げ、住宅地化の激しい台地部の近郊都市において、どのような地名が支持され志向されて来たのか、さらには、新しい地名は新住民にとってどのような意味を持つのか、といった部分にまで及んで、住居表示町名を中心とした新地名に関する若干の考察を試みることにしたい。

II 相模原台地北部における地名変化の動向

1 地域の概況

相模原台地は、相模川の東岸に細長く南北に広がる台地で、神奈川県のはほぼ中央部に位置している。相模原付近では、河成段丘が良く発達していて、上位から相模原・田名原・陽原の3つの段丘

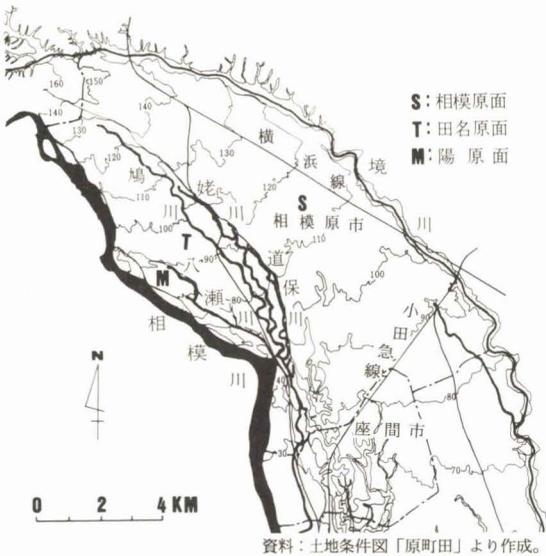


図1 相模原台地北部の地形

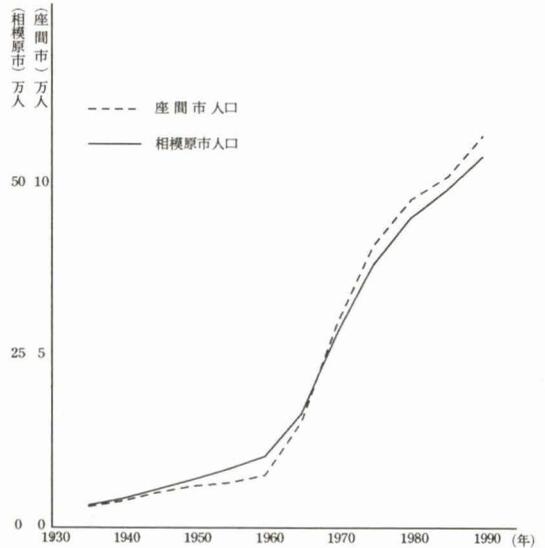
面に大きく区分される(図1)。中・下位の田名原面・陽原面には、小規模ながら河川が流れているため、古くから集落や耕地が開けていたが、最も広い面積を占める最上位の相模原面は、比較的未開析で水利に乏しく、20~30mに及ぶ厚い関東ローム層に覆われているため、耕地や集落の開発は遅れた。

相模原面は、近世に開発された新田、明治期に開発された新開集落のほか、横浜線(1908年開通)各駅周辺に新しく形成された集落を除くと、第二次世界大戦以前は畑地・桑園・平地林・原野が一面に広がる地域であった。しかし、第二次世界大戦期(1930~40年代)に、台地面へ多数の陸軍施設が進出し、ことに相模原北部には軍需関連工場や住宅も相次ぎ建設された。1941年には軍都建設の一環として、旧座間町を含む相模原台地北部2町6か村が合併して相模原町が誕生したが、座間町のみは1948年に分離している。1950年代までは、畑地・桑園・平地林・軍事施設跡地が広がっていたが、高度経済成長期になると、工場や住宅団地の建設が急速に進み、台地面は一気に市街地化した。ことに相模原市では、1955年に工場誘致条例を施行し、北部に工場を積極的に誘致して工業化を進める一方で、1958年には首都圏整備

法による市街地開発区域第1号の指定を受け、南部(小田急線沿線)では公団等による住宅建設が相次ぎ、住宅都市としての様相を強めるようになった。

両市は、首都・東京から30~40kmほどの圏内に位置し、東京・横浜とは電車で40~50分ほどの距離で結ばれていることなどから、その後も小田急線沿線を中心に、多数の住宅団地が建設され、1960~70年代には、全国的にも希な人口急増を見た。相模原は1954年に、座間は1971年に市制を施行し、1994年10月現在、相模原市は人口567,058人・面積90.77km²、座間市は人口118,147人・面積17.58km²を有する住宅都市となっている。

両市の戦後の人口推移は、図2に見る通りで、相模原市の人口は、1954年の市制施行時に8万人、1960年で10万人であったものが、1967年に20万人、1971年に30万人、1977年に40万人を越え、さらに1987年には50万人を突破している。ことに、1960~70年代の人口増加は激しく、1967年から1977年までの10年間には人口が倍増し、20万人の人口増加があった。同様に、座間



資料:相模原市・座間市『統計書』(1994)より作成

図2 相模原市・座間市の人口推移

市でも1950年に1万人、1960年で1.5万人ほどであった人口は、1969年には5万人を越え、1971年に市制を施行している。その後も人口増加は続き、1975年に8万人を、1985年には10万人を突破している。

当該地域は、1950年代までは、両市合わせても人口10万人にも満たない農村地帯であったが、40年あまりを経た現在では、70万人近い人口を擁する大都市へと変貌した。そして、この間に、旧集落が少なく地名も比較的疎であった相模原面にも、住宅地の増加とともに、次々と新しい地名が付けられて行ったわけである。

2 地形図と土地宝典に見る地名

前述したような激しい都市化に呼応して、1960年代以降、当該地域では、地形図が頻繁に修正発行されている。そこで、まず、市街地化の進行に伴う地名変化の概要について、地形図をたどる中から把握してみることにしたい。さらに、地形図ではなかなか表現されない小字の動向についても、『土地宝典』をもとに追うことにしたい。

1) 50,000分の1地形図に見る地名

当該地域では、人口増加、つまりは住宅開発の最も激しかった時期には、1~2年毎に地形図に修正が加えられ発行されている。25,000分の1地形図「上溝」「八王子」図幅を例にその状況を見ると、1966年と1975年に行なわれた改測の間に、1968年・1969年・1971年と3回にわたる修正測量が行なわれている。これらに隣接する「原町田」「座間」「厚木」の各図幅も同回数の修正を重ねて発行されている。同様に、50,000分の1地形図の場合も、1957年及び1967年の編集以降、「藤沢」図幅では、1970年と1975年の修正を経て、1977年に第2回編集が、「八王子」図幅でも、1970年の修正を経て、1976年に第2回の編集が行なわれている。

ここでは、まず、地名変化と動向を地形図から大まかに把握することに主眼を置くこととし、さしあたっては50,000分の1地形図を用いて分析を加えることにしたい。ここで対象とする相模原・座間両市域は、50,000分の1スケールでは

「八王子」「藤沢」の2枚の地形図に収まるエリアである。この地域における50,000分の1の地形図は、「八王子」図幅が1906(明治39)年から「藤沢」が1909(明治42)年から作成されており、1990年までの間に「藤沢」図幅で24回、「八王子」図幅で18回に及ぶ編集・修正等が行なわれている。これらの地形図の中から、昭和前期から現在までの地名変化の動向を捉える資料として、とりあえず、次の6つの年次のものを用いた。都市化以前の時代の地名を捉える資料としては、1927年及び1945年の地形図を、都市化の時期は編集年のもとを中心に、1957年・1967年・1976年・1989年とほぼ10年毎の地形図を用い、地形図上に見られる地名変化の動向を追うことにしたい。

表1は、簡単な地名変更の経過と、50,000分の1地形図から拾った、相模原・座間両市域の相模原面上の特徴的な地名を示したものである。字名に相当する地名の記載数は、第二次世界大戦以前の地形図では1927年・1945年ともに80程度であるが、大戦後になると大幅に増加し、1957年に97、1967年には1989年とほぼ同数の133に達している。地名数は、1960年代には大戦前よりも50以上も増えており、ことに急速に住宅地開発が進んだ1957年から1967年までのわずか10年の間には、36に及ぶ増加を見ている。新たに記載の増えた地名の大半は、〇〇台・〇〇ヶ丘地名及び中央・千代田等のいわゆる中央地名である。

次に、地名増加の動向について、もう少し詳しく地域別に見てみることにしたい。ここでは便宜上、相模原市域を性質別に、工業地域として開発が進んだ北部、住宅地域としての開発が進んだ南部、そして行政機関の多い中央部の3地域に分けてみた。戦前期は、いずれの地区にも新田・新開地名がいくつか見られるが、戦後になると、こうした地名は地形図から姿を消している。北部に工場誘致の始まった都市化初期の時期に当たる1957年の時点では、北部・中央部には〇〇町の地名が目立つ。北部では、工場に関連した地名もあり、例えば「小原町」は、1944年に当地へ進出した「小原光学硝子」の社名に因んだものである。その一方で、この時期から住宅地開発が徐々に進

表1 50,000分の1地形図に見る相模原面の特徴的な地名

年次	地名数	特徴的な地名
1927	85	北部（橋本新田） 中央（清兵衛新田，矢部新田，淵野辺新田） 南部（大沼新田，下溝新開，谷口新開，中和田新開，中村新開）
1945	83	座間（皆原新開）
1941 1948 1954		相模原町発足 座間町分離 相模原市制施行
1957	97	北部（上町，寿町，新町，南町，高砂町，久保町，小原町） 中央（清新本町，富士見町，相生町） 南部（大野台，麻溝台，旭ヶ丘，翠ヶ丘） 座間（相模台，立野台）
1959 1964		座間町で区画整理等による字名変更開始 相模原市で住居表示開始
1967	133	北部（本町，南町，高砂町，久保町，小山本町，小原町） 中央（中央，富士見，星ヶ丘，鹿沼台） 南部（大野台，旭ヶ丘，鶴ヶ丘，翠ヶ丘，相武台団地） 座間（相武台，相模台，雲雀ヶ丘，緑ヶ丘）
1971 1974 1981		座間市制施行 座間市で町名変更開始 座間市で住居表示開始
1976	120	北部（上町，元橋本町，大山町，すすきの町） 中央（中央，富士見，千代田，星ヶ丘，光が丘，緑が丘，鹿沼台，由野台，陽光台） 南部（大野台，麻溝台，南台，相模台，相武台，旭町） 座間（相武台，広野台，立野台，緑ヶ丘）
1989	139	

資料：1：50,000地形図「八王子」「藤沢」より作成。
 ってきた小田急線沿線の南部・座間地域では〇〇台・〇〇ヶ丘の地名が目立つ。つまり、住居表示以前のこの地域では、大戦下あるいは終戦期もな

い時期から、ある程度の街が形成されてきた工場・官庁街では〇〇町の地名が、また初期の新興住宅地では〇〇台・〇〇ヶ丘の地名が多いのが特徴と言える。また、南部でも一部に〇〇町の地名を見ることができるが、こうした地区は旧軍事施設周辺で、終戦間もない時期に街が形成されたところが多い。

その後、1964年からは、相模原市において中央部から住居表示が開始され、地名は再び変わり始める。人口急増期の直中である1967年には、南部・座間地域では〇〇台・〇〇ヶ丘の地名が一層目立つようになる。一方、北部は引き続き〇〇町の地名が目立つが、すでに住居表示が実施された中央部には、中央・富士見といった東京都内の地名が見られるようになる。さらに1970年代後半以降は、中央部にも住宅地化の波が押し寄せたこともあって、この地域にも〇〇台・〇〇ヶ丘の地名が増えて来ている。この時期は、住居表示の実施によって再度地名の改称が進んでいるが、中央官庁街では東京の中央部に類似した町名が、また、新興住宅地では引き続き〇〇台・〇〇ヶ丘の地名が増加の傾向にある。

このように、地形図から大まかな地名変化の動向を追ってみると、一つの市域においても、地域の都市的性質や都市化の段階にある程度呼応して、地名が移り変わっているという傾向を読み取ることができよう。

2) 『土地宝典』に見る地名

住宅地開発の進行とともに、住居表示の実施が進んで、旧来の地名は大きく変わっている。住居表示が実施されると、大字〇〇字〇〇と呼ばれてきた地域が、〇〇台〇丁目という呼び方に変わる。つまり、住居表示の実施は、従前の大字や小字の消滅を意味する。そこで次に、座間市を事例に、「字」、ことに小字の数が住居表示によってどのように変化して行ったのかについて、『土地宝典』を資料として見ることにしたい。『土地宝典』は、公図（地籍図）をもとに民間で作成された字別の地番反別入地図で、座間においては、1928年のものが『地番入地図』、1962年と1989年のものが『土地宝典』の名で刊行されている。

表2 『土地宝点』に見る座間市の字数の変化

1928 (S3)		1962 (S37)		1989 (H1)	
大字	小字数	大字	小字数	大字	小字数
栗原	20	栗原	21	栗原	14
座間	112	座間	101	座間	9
座間入谷	218	座間入谷	159	座間入谷	11
新田宿	15	新田宿	11	新田宿	9
四ッ谷	18	四ッ谷	20	四ッ谷	17
		相模台	3	相模が丘	(6)
		相武台	2	相武台	(4)
		立野台	—	立野台	(-)
				小松原	(2)
				ひばりが丘	(5)
				広野台	(2)
				さがみ野	(3)
				東原	(5)
				緑ヶ丘	(6)
				明王	(-)
				入谷	(5)
計 5	383	計 8	317	計 16	60(38)

(注) ここでは、住居表示町名は大字とした。()内は、丁目数。

資料：昭和3年『地番入地図』（大日本市町村地番入地図刊行会刊）、昭和37年『土地宝典』（帝国市町村地図刊行会刊）、平成元年『土地宝典』（明広社刊）、いずれも座間市立図書館所蔵より作成。

これらの資料から、^{あざ}字数の変化を示したものが表2である。これによると、高度経済成長期まで300以上あった座間の小字数は、現在ではわずか60ほどに減り、丁目数まで含めても100に満たなくなっている。座間にある旧来からの大字は、栗原・座間・座間入谷・新田宿・四ッ谷の5つであるが、1959年の字名変更により、1962年の『土地宝典』には、相模台・相武台・立野台の3つの字の増加を見ている。増えた3つの字は、当時、住宅地開発が進みつつあった台地上に位置し、いずれも〇〇台という地名が付けられている。

旧来、座間市域における台地部の小字名には、広野・小松原・中原・東原・西原といった「原・野」地名が多く見られた⁷⁾が、平地林・原野・畑地が住宅地として開発される際に「台・丘」地名に変更されて行くケースが多い。住宅地の地名と

してはイメージ上、旧来の「原・野」地名よりも、「台・丘」地名が好まれることを端的に示しているものと言えよう。1981年以降、住居表示の実施がかなり進んだことにより、1989年の時点では「原・野」の付く小字の減少などに伴って旧大字内の小字数が60に減っている。ことに、1962年～89年の27年間だけで小字数は5分の1以下に減少した。その一方で増加した、台地部を中心とした住居表示による新町名は11あり、このうち「台・丘」の付くものが6地区でその2分の1を越え、「原・野」の付くものは3地区となっている。

このように、『土地宝典』から小字を中心とした台地上の地名変化の動向を追ってみると、平地林・原野・畑地であった時期は「原・野」地名であった地区が、住宅地化の進行という都市化のステージに立った時、「台・丘」地名へと移行して行くことが分かる。つまり、土地利用の変化は、地名の変化も招いていると言えよう。この際、住居表示の実施による新町名の設定は、結果として従来の小字を消失させている。

III 新興住宅地における住居表示の実施と町名

1 住居表示町名に見る地名の志向

1962年に住居表示法が施行され地名改変が進む中で、旧来の伝統的地名の消失が社会的問題となり、遅れながら1985年に、住居表示法の一部が改正され「(前略)新たな町又は字の区域を定めた場合には、当該町又は字の名称は、できるだけ従来の名称に準拠して定めなければならない。(後略)⁸⁾」こととなった。しかしながら、相模原・座間両市の大半の地区では、すでにそれ以前に住居表示が進められており、全国どこにでも見られるような町名が付いている地区も少なくない。1960年代から70年代前半までの間に付けられた町名に関しては、とくにこの傾向が強い。確かに従前の批判のとおり、一部には従来の地名や地域呼称とは無関係な新町名も見受けられるが、当該地域の場合、元来、地名分布の少ない平地林・原野・畑地が住宅地として開発されているため、新たな

町名設定が必要であった地区も少なくなく、必ずしも一概に新町名のすべてが地名改変に当たるとは言い切れない事情がある。

さて、表3には、相模原・座間両市域における、住居表示の実施状況を町名とともに示した。住居表示法の施行に先立ち、座間市ではすでに1959年から字名変更が開始され、前述した通り、すでにこの時点で〇〇台・〇〇ヶ丘の地名が登場して

表3 住居表示等の実施経過とその地名

年次	新字名・住居表示町名（太字は座間市）
1959 (S 34)	座間市字名変更開始。相模台、立野台
1962 (S 37)	緑ヶ丘
1964 (S 39)	相模原市住居表示開始。すすきの町、向陽町、氷川町、清新、相模原、中央
1965 (S 40)	共和、富士見、鹿沼台、相生、矢部
1966 (S 41)	橋本、淵野辺
1967 (S 42)	大山町、松が枝町、小山、元橋本町、南橋本、東橋本、東林間
1968 (S 43)	千代田、由野台、星が丘、高根、弥栄、宮下、横山
1969 (S 44)	栄町、豊町、旭町、南台、相模台、相武台、相武台団地
1970 (S 45)	光が丘、桜台、相模台団地、文京、御園、並木、双葉、明王
1971 (S 46)	青葉、相南
1972 (S 47)	西大沼、東大沼、若松
1973 (S 48)	大野台
1974 (S 49)	座間市町名変更開始。陽光台、緑が丘、相武台、広野台、小町通、小松原
1975 (S 50)	西橋本、二本松、座間
1976 (S 51)	横山台、上溝、入谷
1977 (S 52)	ひばりが丘、上鶴間
1978 (S 53)	上矢部、淵野辺本町、新磯野
1979 (S 54)	松が丘、北里
1980 (S 55)	宮下本町
1981 (S 56)	座間市住居表示開始。相模が丘、相模大野
1983 (S 58)	栗原
1985 (S 60)	東淵野辺、さがみ野
1988 (S 63)	相原
1989 (H 1)	麻溝台、南栗原
1990 (H 2)	橋本台
1991 (H 3)	古淵、栗原中央
1993 (H 5)	鶴野森

資料：相模原市及び座間市住居表示係資料による。

いる。相模原市においては、住居表示法施行2年後の1964年から住居表示が始まり、まず市役所周辺の中央地区から実施されている。この地区は、もともとは新田開発区域で、大字「清兵衛新田」となっていたため、住居表示に際してはこの略称を用いた「清新」という新町名が登場している。また、現在、相模原の中心商店街の一つとなっている横浜線相模原駅周辺も、当初は「清兵衛新田」から取った「新田」の新町名案が提示されていた⁹⁾。しかし、最終的には田舎をイメージさせる「新田」の町名は嫌われ、経緯は定かではないが、新町名は駅名と同じ「相模原」となった。同時期に住居表示が実施された市役所周辺のみは、従来の地名とは無関係な「中央」の町名が付けられている。これ以降1970年代前半にかけて、相模原市では急速に住居表示が進み、第3表に見る通り、多数の新町名が登場している。古くから集落のある矢部・橋本・淵野辺・小山・大沼の各地区は旧大字名を町名として継承しているが、他のほとんどは新たな町名が付けられている。

大まかな傾向を見ると、住居表示実施初期の1964年から1969年までの間は、〇丁目表示を伴わない町名（〇〇町など）が11出来ている。これらの中には、住居表示以前から親しまれてきた〇〇町の地名をそのまま引き継いだものが多い。しかし、住居表示の実施に当たっては、住所検索の利便性を考え、一町名のエリアにある程度の面積を持たせるという配慮から¹⁰⁾、相模原市では、1970年以降に実施した住居表示地区には、丁目を持たない町名は付けていない。こうしたこともあって、後述の相模原市「千代田」の例に見るように、従前の自治会単位程度のエリアに対するの呼称となっていた〇〇町の地名は消滅の方向に向かった。

1970年前後は、中央地区を中心に住居表示が進んだことも関係するが、「千代田・富士見・文京」といった東京中心部の地名に因む町名が目立つ。さらに、1970年代前半には、新興住宅地を中心に〇〇台・〇〇ヶ丘の地名も目立っている。しかし、1970年代後半以降は、住居表示の実施区域が徐々に旧集落地区に移行したことや、できるだけ

「従来の名称に準拠」した努力もあって、旧来の地名もしくは、旧来の地名の頭部「東西南北」または、後尾に「台」をつけた程度の改変に止めた町名が多くなっている。

2 新町名の決定経緯

住居表示の実施にあたり、新町名はどのように選定され、決定されて行くのであろうか。しかし、それらの経緯はなかなか公の資料としては残りにくいのが現状である。住居表示町名の選定経緯に関する資料を、公文書の中に求めようとしても、せいぜい新町名の原案と、町名の決定結果が綴られている程度というのが実情で、あまり期待は出来ない。というのも、町名決定に関しては、住居表示法第3条第4項に「住民にその趣旨の周知徹底を図り、その理解と協力を得て行うように努めなければならない」とあるように、一般には地元住民の意向が尊重されることとなる。このことから、形式的には多くの市町村では、議員・行政関係者・学識経験者等から成る「住居表示審議会」を設置し、この場で新しい町名等について審議する手続きを取っている。審議会の内容は公文書として残されるが、実際の町名候補選定の基本的部分は、地元自治会などに委ねられている場合が多く、相模原市や座間市においても、基本的に町名は自治会などで原案が選考されている。このために、町名選定に当たっての基本的部分は、自治会内で討議されているケースが多く、こうした場合、その討議経過は、公文書としては残りにくいのが実情である。つまり、住居表示審議会に新町名案があがって来る以前の、町名検討に関する具体的な経緯は不明な場合が多い。ここでは、筆者が両市の住居表示担当課で直接得ることの出来た資料並びに、各自治会記念誌等から得られた資料などをもとにいくつかの事例を提示し、いくらかでも新町名決定の経緯について明らかにしてみたい。

(1) 「丘」の付いた町名

相模原市と座間市には、「丘」または「台」の付く町名が23ほどあるが、いずれも台地最上位面の相模原面に位置し、もともと集落はほとんど無く、平地林や原野・畑地が広がっていた地域であ

る。このため、旧来からの地名は平地林や原野・畑地の部分呼称として付けられたものが中心で、「野」「原」地名が目立つ¹¹⁾。こうした点を考慮すると、この地域における〇〇台・〇〇ヶ丘という町名は、新興住宅地という新集落に対して付けられた現代の集落地名と解することもできる。

ここでは、1970年7月1日に住居表示が実施された相模原市「光が丘」を事例として、この住宅地区に「丘」の付く町名が選定された経緯を見ることとしたい¹²⁾。この付近は、住居表示実施以前は大字・上溝に属していて、地籍図上の小字は、明治前期に甲乙丙丁戊と数詞の組み合わせによって付けられていた。地形的には相模原面に位置し、西方に丹沢山塊を臨む地域であることから、景観上「丘」地名が付いてもおかしくはない地区である。この付近に集落形成が始まったのは戦後間もない時期で、「青葉」という開拓団が入植してからのことである。住宅地開発が進む以前は、大半が平地林及び開墾地となっていて、この付近は開拓団の名を取って「青葉」と呼ばれていた。この地区の住居表示町名としては、当初、この「青葉」の名も有力候補の一つとなっていた¹³⁾ようであるが、自治会の町名選考経過の中では、最終的に「光が丘」の町名があがってきている。

この地区は、1960年代後半、民間宅地開発業者によって、「ひかりが丘分譲地」の名称で分譲販売が行なわれた地区であった。分譲地の名称の由来については定かではないが、結局、この分譲地名が町名の最有力候補となった。市の原案ではこの地区を7分割し、「光が丘」を1~7丁目までとする計画であったようであるが、一部自治会で反対があったため、最終的には1~3丁目までが「光が丘」の丁目として成立した。残る4丁目分は、別の町名を選定することとなり、4~7丁目と計画されていた区域は、「並木」1~4丁目として同時期に成立している。「並木」という町名の選定経過を見ると、以前、この街区の東縁に30m幅の通称「並木道」と呼ばれる広い道路があり、これに因んで命名されている。

この地区は、自治会の意見の相違により、2つの町名に分割されてしまったものの、ここで付け

られた「丘」地名は、民間の分譲地名がそのまま町名として成立したケースである。

(2) 東京の地名が付いた町名

ここでは、1968年7月1日に住居表示が実施された、相模原市「千代田」という住宅地の町名について、選定当時の自治会役員が自治会誌¹⁴⁾などに残した記録をもとに、中央地名の選定経緯を見ることとしたい。

この地区も、もともとは大字・上溝に属する相模原面上に位置し、1960年代以前は大半が平地林及び原野・畑地となっていた。この地区には、「取り上げるような史跡もなく、終戦までは樹齢六・七十年の大木を交えた山林で、季節には数多くの山百合が、匂う処であった¹⁵⁾」という。この付近に、住宅が建ち始めたのは1950年代後半以降のことで、1967年になって新星町・住吉町の2自治会が成立している。

当該地区には、住居表示実施時にこの2自治会があったため、どちらの町名を取るかでお互いに譲らない状態が続いたようであるが、10数回にわたる地区代表者会議が持たれた結果、新星町・住吉町両自治会名は解消するという方針で、新たな町名選定が始まっている。その後、新町名は地区住民から公募するという形を取り、30町名程の応募があったという。あげられた町名は、高樹・ひばりが丘・芝原・芝園・末広・八千代・高砂・若葉などとなっている。これら町名を見ると、「丘・原・芝」といった景観に基づいたものや、「末広・八千代・高砂」など縁起を担いだものが多かったようである。最終的には、地元の選考委員によって、千代田・若葉・高松の3案に絞られ、委員の最終投票で千代田10票・若葉1票・高松1票となり、圧倒的な支持で「千代田」に決定されている。

さて、この中央地名である「千代田」がなぜ案にあがってきたかという点であるが、発案者の回顧録¹⁶⁾によれば、1950年代中頃、当家の敷地の角に相模原市航空写真撮影用の基準点と見られる日章旗が翻っているのを見て、ここは相模原市の中心なのだという確信を得、東京の中心が千代田なのだから、相模原の中心に位置するこの地区も千

代田としたらどうかというのが発想の原点であったという。このほか、当該地区が当時すでに住居表示済みの「中央」(1964年実施)の南側に隣接していたため、「南中央」という町名案もあったという。しかし、当局からの「他と紛らわしい町名は出来るだけ避けて欲しい」との意見や、一部地元住民からの反対により取り止めたとされている。

3) 選定時に逆転決定された町名

小田急線相模大野駅からバスで10分程のところに位置する、相模原市南部の新興住宅地に「御園」という、かなり難しい読みの町名が付けられている地区がある。この地区は、1970年7月1日に住居表示が実施されているが、なぜこのような町名が選定されるに至ったのか、その経緯を見ることとしたい¹⁷⁾。

この地区も、相模原面上にある平坦地で、1964年頃から民間による大規模な住宅地開発が始まったが、それ以前は大半が平地林及び原野・畑地となっていて、集落は無かった地区である。

この地区には、住居表示の審議が始まった1969年当時、5つの自治会があり、新町名の選定に当たっては、各自治会から1ずつ町名の候補を出し合い、その5候補の中から住民投票によって町名を決定しようという方法を取っている。

各自治会から候補としてあげられた町名は、大野・草薙・北野台・幸・御園の5つであった。住民投票の結果によれば、726票中334票で「大野」が1位となり、174票だった2位の「草薙」以下、「北野台」の85票、「幸」の75票、「御園」の58票を大きく引き離している。この1位の「大野」は、旧来、この付近の小字ともなっていた地名である。しかし、結果としては、最下位の「御園」が採用され、現在町名となっている。なぜ、住民投票では最下位だった町名が、逆転して採用されるに至ったのかを見ることとしたい。

この結果をもとに、市の「住居表示審議会」で選考が行なわれているが、この地区の場合、スムーズには審議が進まず、各委員から上位4つの町名について異見が出されている。それぞれの反対理由は、次の通りである。第一候補であった「大野」は、原野を連想させイメージが悪く、当

時、「大野」の名が付いていた「相模大野駅」から当地までは、かなりの距離があるので誤解を招くというものであった。第二候補の「草薙」については、「薙」の字が当用漢字には無いというものであった。次の「北野台」については、市の南部にあるのに「北」が付くのはおかしいというものであった。さらに「幸」については、市内各地に自治会名として複数存在し、独自性のないものということであった。この結果残った、住民投票では最下位の「御園」が支持されることとなり、その賛成理由として、他に類似した町名・地名は無く、「園」は自分らが耕し造った庭の意があり、新興住宅地の町名としてふさわしいというものであった。

しかし、各反対理由を見てみると、「薙」の字が当用漢字に無いからというのは、住居表示実施基準に照し合わせても合理的なものであるが、他の理由はいずれもイメージ性の強いものであることがわかる。町名選定に際し、いかにイメージが重視されているかを端的に表した事例と言えよう。

4) 隣接して2つある同町名

住居表示町名として、相模原・座間両市の市境を走る小田急線の相武台前駅を挟んで、相模原市と座間市に2つの「相武台」がある。ここは、この相武台前駅がほぼ両市の市境に位置し、旧来からこの駅の周辺の地名が相武台とされていたことから、2つの「相武台」という町名が誕生してしまっている。「相武台」の地名は住宅地開発とは無関係で、第二次世界大戦中の1937年に、当駅近くにあった陸軍士官学校に天皇が行幸した際、天皇によって命名されたものである¹⁸⁾。

町名としては、相模原市側は1969年に、座間市側は5年後の1974年に住居表示が実施されている。この際、ことに後から実施した座間市では、隣の市同士で同じ町名を付けることには異見が出たものと推測されるが、現在のところ詳しい資料が無いため、その経緯は定かではない。ここでは、町名選定の経緯に関する資料をもとに、「相武台」と同様の2つの「相模台」が誕生するのを避けた事例を紹介することとした¹⁹⁾。相模原市には1969年に「相武台」と同時に、「相模台」も住居表

示を実施している。当時、座間市においても、相模原市「相模台」に隣接する地区に、同じく字名として「相模台」があったが、この地区では、1981年6月1日の住居表示の実施に際し、「相模台」の旧字名を廃して「相模が丘」に町名を変更している。

この地区は、もともと大字・座間及び広野に属していたが、1959年に字名を変更して「相模台」となった。この地区は、小田急線の小田急相模原駅と相武台前駅のちょうど中間付近に位置し、1960年代以前は大半が平地林及び原野・畑地となっていた。相模原面上に位置し、西方には丹沢山塊を臨むことから、まさに「台」地名を付けるにはふさわしい地区であるが、字名変更の際に、「相模台」とされた経緯については詳しい資料が無いため、定かではない。

先に述べたが、相模原市「相模台」は、1969年に住居表示が実施されているが、座間市の「相模台」地区に住居表示が実施されたのは、かなり遅れて1981年のことである。この地区では、住居表示の実施に先立ち、1980年に町名決定に関する住民アンケートを行なっている。市から各自治会にアンケート用紙を配布した際の説明会の席で、若干の質疑が行われている。その一つに、すでに相模原市に「相模台」があるので、座間市側としては同じ「相模台」ではまずいのではないかという質問が住民側から出ていて、市側からは、同じ町名が2つあると郵便局側で不便を生ずるようだというとりあえずの回答が出されている。

さて、アンケートについてであるが、アンケート用紙そのものは現存しないため、具体的設問形式は不明であるが、6253枚配布されたうちの2240枚が回収され、35.8%の回収率を見ている。この集計結果によれば、「相模が丘」が第1位となり512票と22.9%を占めている。当時の字名となっていた「相模台」は2位で399票、17.8%の割合であった。そのほか、100票以上を得た町名は、「相模野・桜台・相模」の3つであった。従来の字名である「相模台」は2位に付けたものの、それ以上に、住民の中には、相模原市と同じ町名をつけない方が望ましいという心意が窺える。そ

のほか、6位以下の町名には、旧来の字名に準じた「座間・広野（広野台・南広野）」や、付近に桜並木があったことから、「桜が丘・桜町・桜通り」の町名も見られる。結局、この住民アンケート結果が重視され、住居表示審議会においても「相模が丘」が支持され、「相模台」の旧字名は、この新町名に変更されるに至った。

IV おわりに

以上、近郊都市である神奈川県相模原市及び座間市を事例として、都市化に伴う地名変化について、とくに台地上の新興住宅地における町名選定の経緯等の中から概観してみた。

最後に、当該地域の地名変化の動向をごく大雑把に振り返ることとしたい。近郊都市の台地部は、もともと平地林や原野という土地利用条件から、今日にくらべると地名はそう密には分布していなかったし、また地名を多く付ける必要もなかった。相模原台地上、ことに最上位の台地上の旧集落地名は、近世の新田地名や明治期の新開地名が中心で少なく、第二次世界大戦以前の特徴的な集落地名となっている。その後も、1950年代までは、戦地からの引揚者対策や食料増産対策として、軍用地跡地を中心として開拓が進められ、ここには開拓地名が付けられている。つまり、相模原台地上にはそれぞれ時代毎の集落地名があって、江戸時代のは新田名、明治時代のは新開名、昭和戦後のは開拓団名ということになる。相模原台地の場合、都市化以前という観点からの集落地名を考えると、1950年代まで見られる開拓地名までを旧地名と呼んでも良いのかもしれない。その延長上で、台地上の新興住宅地における住居表示町名を考えると、新田・新開地名を消失させた点で、やや異論は出ようが、それはまさに現代の集落地名と解することも可能であろう。

さて、近郊都市において、地名数が急速に増加するのは、都市化の波を直接受けるようになった、1960年代からである。この時代になると、台地上の土地開発行為は、従前の耕地や雑木林とし

ての開発から工場や宅地の開発へと変わり、地名もそれまでの集落や耕地を中心とする土地認識のための呼称から、工場や住宅地の性格をも表わすものへと変化し、地名の構造と地名の持つ意味は大きく変質したと言える。つまり、人々の地名認識は、都市化以前と、都市化以後とでは、大きく異なってきている。

1960年代以降の激しい都市化によって、台地最上位面上には工場・住宅地が急速に増え、人口増加とともに新たな地名が続々と登場した。新たな地名には〇〇町・〇〇台・〇〇が丘、あるいは東京中央部に因んだものが目立つようになった。地域的に見ると、北部の工業・住宅地域には〇〇町の町名が、中央の官庁・住宅地域には中央の町名が、南部の住宅卓越地域では〇〇台・〇〇が丘の町名が多いのが特色と言える。1970年代前半までに誕生した新町名には、このように全国共通的な地名が多く、住居表示による行政地名として好ましくない例として、しばしば批判を浴びる結果となった。しかし、こうした典型的な近郊都市の町名も、個別に選定経過を追ってみると、必ずしも行政が一方向的に押し付けたものとは言い切れず、むしろ住民の意向によるところが大きいと言える。つまり、よく話題にされる現代地名の問題は、行政のセンスの無さを取り上げ、どうしても運動論的に行政批判を展開して行くケースが多いが、むしろ、地域住民の居住地に対するイメージの表象と読み替えて考えた時、別の観点からの現代地名研究を可能としよう。ことに、新興住宅地の地名については、〇〇台や〇〇が丘という町名の方が、分譲に有利であるとか、聞こえが良いとかという表面的な理由を越えて、町名から地域住民がその地区をどのような居住空間として認識しているかという姿を見て行くことをも可能とするのではないだろうか。今後、このあたりについても、さらに検証を重ねてみたい。

本稿は、1992年に開催された「第5回神奈川県地名シンポジウム」の発表内容及び、同年実施の座間市歴史講座「地名アラカルト」の講義内容をもとに、その後の若干の調査結果を加えてまとめ

たものである。

注記

- 1) 新村出編『広辞苑 第三版』岩波書店 1983 p. 1551.
- 2) 日本地誌研究所編『地理学辞典 増補版』二宮書店 1981 p. 488.
- 3) 藤岡謙二郎編『最新地理学辞典 新訂版』大明堂 1979 p. 324.
- 4) 昭和37年5月10日法律第119号。昭和42年2回、昭和58年及び、60年にも改正されている。
- 5) 鏡味明克『地名学入門』大修館書店 1984 pp. 228-229. 藤岡謙二郎『日本の地名』講談社現代新書 1974 pp. 119-120 など。
- 6) 日本地名研究所編『地名と風土』創刊号(特集「地名改変の歴史」)三省堂 1984 など。
- 7) 大日本市町村地番入地図刊行会 昭和三年座間村『地番入地図』座間市立図書館所蔵による。
- 8) 昭和60年6月14日法律第59号改正, 住居表示法

第5条第2項。

- 9) 相模原市戸籍住民課住居表示係資料による。
- 10) 相模原市戸籍住民課住居表示係の話による。
- 11) 相模原市教育委員会編『地名調査報告書』相模原市教育委員会 1984による。
- 12) 相模原市戸籍住民課住居表示係資料による。
- 13) 現在、「青葉」の町名は隣接地区に、1971年に成立している。
- 14) 千代田十周年記念誌編集委員会編『千代田十周年記念誌』千代田自治会連合会 1979.
- 15) 吉田茂「難しかった新町名」, 14) 文献, p. 41.
- 16) 坂野隆介「千代田十周年四万山こぼれ話」, 14) 文献, p. 38.
- 17) 相模原市戸籍住民課住居表示係資料による。
- 18) 相模原市編『相模原市史』第4巻 相模原市 1971 p. 571 参照。
- 19) 座間市市民課住居表示係資料による。